

2. パネルディスカッション

コーディネーター 室崎益輝

パネリスト ルトフ・ラフマン（アフガニスタン）

彭廷国（中国・四川）

ジャン・クロード・レフェルブ（ハイチ）

コメンテーター 村井 雅清

（１）現在の復興の状況について

○室崎益輝

それではパネリストの皆さんのご意見を聞きながら、CODEとのかかわりや、さらにそれを踏まえて国際的な災害支援・受援のあり方について考えてみたいと思います。今、村井事務局長からCODEの支援内容について報告がありました。それに対する補足あるいは訂正を含めて、それぞれコメントしていただきたいと思います。最初にアフガニスタンのラフマンさん、お願いします。



○ルトフ・ラフマン

初めに、アフガニスタン、特にミールバチャコットエリアを代表しまして、この場に呼んでいただけたことを感謝します。ご存じのように、災害は一瞬もしくは数分間のうちに起きます。ただ、そこからの復興にはとても長い時間がかかります。アフガニスタンではここ数年のうちに多くの人為的災害が起こっており、それらからの復興には長い時間が必要です。

今朝、ある方から質問を受けました。それはラマダンについてです。ラマダンというのはイスラームの習慣で、1年のうち1カ月間、日中は何も食べないという月です。食べるものが無い人が世界中にたくさんいます。何も食べないで、やはりそのときに苦しんでいる人たちのことを思うのが重要であること、そしてその人たちのために食料をとっておいて分けるというような意味合いを持っているとお答えしました。

それは、先ほど芹田代表の話にもあったように、最後の一人を思うというところにつながっていると私は考えています。CODEがアフガニスタンで支援を始めて10年になります。ナハリン地震の被災地でCODEは2つの学校を支援しましたが、昨年、そこを卒業した2～3名が大学へと進みました。アフガニスタンには首都に1つだけ大学があり、長い時間をかけて通うのです。

もうひとつの支援はぶどうプロジェクトです。開始時にはミールバチャコットに人はほとんど住んでいませんでしたが、CODEの支援によって、人々がもとの村に帰ろうという希望が生まれたと思います。詳しくはまた後ほど紹介させていただきますと思います。



○室崎

ラフマンさんは、芹田代表の言った「最後の一人まで」に触れて下さいました。時間があれ

ば、これは、海外の支援のあり方としてしっかりと議論を深めたいと思います。

また、ご存じのようにCODEというのは小さな団体です。お金は全くありません。でも、そのちっぽけな組織でも、あるいはわずかなお金でも、その地域の人たちと一緒に力を合わせればとても大きな力になる。学校支援については後でまた詳しい話があると思いますが、ぶどうプロジェクトが地域に希望を与えてくれた、大きな支援を受けたと言っていたことはありがたいと思います。

それでは次に、四川の彭さん、お願いいたします。

○彭廷国

皆様、こんにちは。先ほど村井さんから光明村に関して説明いただきました。私はその村唯一の医者です。5・12の汶川、四川大地震は、私たちの住む村に大きな損害をもたらしました。世界の多くの方々から、またCODEの方々に支援をいただきました。その支援をいただいてから、村ではもう新しい西洋風のきれいな家が立ち並んでいます。このようになったのは国際的な支援を受けたことと切っても切り離せません。CODEに建てていただいた光明村の老年活動センターはうまく運営され、大きな影響を与えています。運営の詳しいことに関しては、後ほど詳しくお話いたします。

○室崎

もう一度彭さんに少しお聞きしたいのですが、先ほど村井さんが、「彭さんは最初は日本人が嫌いだったけれど、CODEの吉椿さんが入ってきて、とても日本人が好きになった」と言いました。どうして好きになったのでしょうか。そのあたりの気持ちを教えていただけますか。

○彭

地震が発生したときに、国外から駆けつけて

くれた最初の援助が日本であり、また、村に来てくれたのも日本人の吉椿さんでした。最初、吉椿さんが村に来たとき、みんな「おかしいな」と思いました。一体日本人がどうして私たちのこの村に来るのかというのが理解できませんでした。吉椿さんとその友達のボランティアの方々が、何もほかのことは顧みず、毎日来て頑張ってくれました。その一日一日が数カ月となり、その数カ月がまた数年となりました。暑い中も、また雨が降っても風が吹いても、どんな環境の中でも被災地のみんなの家の、がけ崩れや家が崩れたところを整備してくれたりしました。吉椿さんたちは何かを欲しがってやっているのではなく、何の報酬も顧みずに、とにかく邁進して、毎日村民の手伝いをしてくれました。光明村のみんなが、そういう態度を本当に心の中から偽りのない行動だと感じ取りました。そして、村の人たちの態度がだんだんと変わってきました。それで、もともと知り合いでもなかった人が本当の友達になりました。



○室崎

先ほど芹田代表の話の中に「最後の一人まで」救うということがありました。支援が行き届かなくて本当に必要としているところに私たちは手を差し伸べなくてはなりません。光明村も小さな村で、なかなかその直後には中国政府の支援も入りませんでした。そこに、私たちが

1つの村をしっかりとサポートしようということになりました。彭さんのお話は、「支援というのは、助ける・助けられるという形ではなく、やはり誠心誠意力を尽くして信頼関係を築いていく」というご説明だったように思います。無理やり聞き出して申し訳なかったですが、どうもありがとうございます。

では最後になりましたが、ハイチのレフェルブさん。ハイチの場合はまだこれから支援が始まる場所ですので、現状なども教えていただければありがたいと思います。

○ジャン・クロード・レフェルブ

皆さんこんにちは。本日はご招待いただきありがとうございます。では、私たちがNGOとして経験してきたことをご報告して、共有したいと思います。特に、2010年1月12日、ハイチ大地震が起こったときにハイチの人々は日本からどのような支援を受け取ったかをお話しさせていただきます。ここでまず、ハイチの人々から皆さんに、この10周年おめでとうございます、そしてご支援ありがとうございますという言葉を伝えなければなりません。私たちが特に一番お礼を申し上げたいのは、シスター須藤昭子様です。

ハイチは地震から3年経ちましたが、状況はますます悪化する一方です。首都であるポルトープランス、そして特に一番状況がひどいのはレオガン、私の生地です。震源地がレオガンだったんです。今に至るまで、何十万人もの人々がテント生活を余儀なくされています。そして、実際に私たちが目にするところでは、このような仮設状態での生活の条件は日々悪化の一途をたどっています。

こうした状況ですから感染症も起こりやすくなってしまいます。特に、コレラが蔓延しています。それだけではなく、若い女性たちに対す

る性的暴行が広がってきています。そのため、何万人もの人がこのキャンプの仮設営の土地に住んでいられなくなってしまいます。さらに、こうした仮設テントは個人所有の土地の上に建てられていますので、そこから立ち退き要求が出ると、立ち退かざるを得ません。実は、地震の前からハイチでは住宅の不足が深刻な問題でした。ここでその理由を説明すると複雑な話になりますので割愛します。

しかし、そういった状況で2012年4月、ハイチ政府は住民の住宅のための特別政策というものを出しました。この法令は、今後の住宅建設に対して特別の優遇策をとるというものでしたが、しかしながらその優遇策に具体的な条件が明記されていませんでした。貧困に見舞われた人たちがちゃんとした住みやすい住居で住めるように、問題を解決するような具体策が盛り込まれていなかったのです。特に、地震の被害に遭った家族たちの、その世帯を復興するという具体案がなかった。しかし、家をなくした人たちが新たに家を借りるための助成金はあまりに少なすぎます。

そこで、多くの人々はアムネスティ・インターナショナルがハイチに実地調査に来たときに陳情しました。特に、賃貸住宅について、どのような解決策があるのか途方に暮れていたからです。一旦家を借りたとしても、その後家賃を払い続けることが不可能な場合が多かったのです。また、このような世帯は、家族に十分な食料を確保する力もありません。したがって悲惨な状況になっており、ハイチは未だ多くの支援を必要としています。支援といっても技術支援が必要です。もちろん金銭的な支援も必要ですが、一番必要としているのは技術支援です。



○室崎

レフェルブさんが触れられたシスター須藤昭子さんのことにつきましては、このパンフレットの中にも書いてございます。須藤さんという素晴らしいお医者さんが、1976年からハイチの人々の支援に入っておられます。お医者さんですが、むしろいろいろな意味でハイチの人々の生活支援をされています。そこにCODEがうまく結びついて、少しずつ今支援活動が始まっているということです。

それから、後半の話はとても大切なことで、これも本当は時間があったら最後に議論したいのですが、やはり貧困の問題、あるいは世界的な大国による財政的な収奪、という言葉が適切かどうか分かりませんが、それにより自立できない経済的な根底が復興を困難にしています。いまだ多くの方がテント生活をされており、地震直後とあまり変わらない状況に置かれているというお話でした。

実は私がハイチの応援を一生懸命やろうと思ったときに3・11が起き、むしろ日本のほうに目が行ってなかなかハイチに目が向けられていませんでした。反省しないといけないと、今のお話を聞いていて感じました。

(2) CODEの支援による変化・影響

○室崎

三つの国と日本、あるいはCODEとの関係

を大まかに会場の皆さんに理解していただけたと思います。次に、CODEが今まで行ってきた取り組みについて、それぞれの国の方はどう思われているのでしょうか。あるいは被災地がどう変わっていったのか、CODEの支援がそれぞれの国の方々に与えた影響をについてお話をお聞きします。

今度は順番を変えまして、ハイチのレフェルブさんお願いします。これからCODEの支援が具体的に行われますが、先ほど技術者が足りないと言われましたので、この点でハイチの置かれている状況をもう少し詳しく説明していただき、村井さんが述べた農業技術学校についても詳しくお話ししていただければありがたいと思います。

○レフェルブ

ハイチは基本的に農業国です。ハイチの経済活動は、実は農業のみと言ってもいいくらいで、あまり大きな他の産業はありません。産業があったとしても全て農業ベースです。しかし、環境の悪化に伴って、農地の土壌劣化が始まり、農民の人たちがだんだん農業離れをするようになってしまいました。ということは、ハイチの食料事情にゆゆしき影響が出てきたということです。国民の食料生活を安定化させるだけの農業製品を十分生産することができなくなってしまっているからです。

そこでGEDDHとしては、農業技術学校を設立することによって、この状況を何とか食い止めようと考えています。そして、今後、若い世代の人たちが農業に根づくようにと考えています。ハイチには農業専門大学、農科大学というものがあるのですが、これは実際の農業従事者のための学校ではなく、むしろお役人のための学校になっています。

そういった理由からハイチには農業の技術者

がない。農業の現場ができる人がいないのです。それゆえ、私どもが必要としているのは農業に関する技術支援です。それによって、若い人たちがきちんとした研修を受け、実際に農業の現場で働けるようにということを考えています。もちろんこの場合の農業技術というのは、最新の農業技術を望んでいます。

○室崎

後でまたアフガニスタンの話もあると思いますが、CODEが考えていることは——CODEだけではないでしょうが——何かものをあげたりお金をあげたりするという支援ではなくて、その国の人たちが自立して生きていける力をどのようにしてつくっていくのかということです。おそらくハイチの場合は、一つはまさに農業の力をしっかり身につけていくことだと思います。村井さんが先ほどCODEの持っている専門的なネットワークをハイチの支援につなげたいと言ったのは、例えば一方で日本のハイテク技術などをハイチに伝え、それだけではなくて、ハイチの中でその農業の技術、能力を持った後継者をしっかり育てていくという意味で、やはりこの学校の重要性は高いだろうと思います。

○レフェルブ

まさにそのとおりです。

○室崎

ハイチの場合は経済的にも苦しくて、政治的にも不安定なところがあるので、ハイチの中で農業技術を持った人がよその国に出ていってしまう、農民が少なくなるということですね。そういう意味でこれから私たちがハイチに対してどのような支援をしたらいいかという課題を教えていただいたように思います。それでは、農業による復興については先輩に当たりますアフガニスタンのラフマンさん、ぶどうプロジェクトなどを含めて、CODEの支援についてどの

ように考えられておられるか、教えていただければありがたいと思います。

○ラフマン

国際社会によって行われた破壊と支援とを比べると、アフガニスタンの場合は破壊されたもののほうが多いと思っています。ただCODEについて言えば、その支援は、先ほども言いましたように財政的なものだけではなく、希望をつくり出してくれました。私は10年前、村井さんとスタッフの斉藤容子さんが来たときのことをよく覚えているのですが、その当時のミールバチャコットはまだ家も壊されたままで誰も住んでいないような状態だったはずです。

村井さんは、阪神・淡路大震災のことやCODEの設立について説明してくれました。どのような問題をどのように解決してきたのかということ、そして今度は海外の人たちを支援するんだ、ということを話してくれました。それは私たちにとってたいへん強いメッセージでした。

「なぜ彼らにできて私たちにできないのか。できるはずだ」と私たちは思いました。希望がなかった私たちに、未来に対する希望が見えた瞬間でもありました。

ミールバチャコットで、CODEはぶどうの協同組合を立ち上げました。シューラといいいますが、その代表組織は毎月もしくは2カ月に1回集まって、いろいろなことを話し合います。それはもちろんぶどうのこともありますが、それだけではなく、村の開発について、例えば水をどう確保するかといった、コミュニティのさまざまなことを話し合う場になっています。ぶどう協同組合は、まず288家族に対して融資を行いました。それがどんどん増えていきます。と言うのは、貸した家族が数パーセントの利子をつけてシューラにお金を返すことで、またほかの人たちがお金を借ります。今ではたくさんの

家族がぶどうの生産を行えるようになりました。

ただ、問題としては市場がないということです。シャモリ平原という地域だけでも100万本のブドウの木があると言われています。このマーケットの問題についてCODEといま話をしています。アフガニスタン自体が国際的なマーケットになかなかアクセスできません。それは、アフガニスタンがやはり平和ではない、不安定な状態にあるために、ほかの国はあまり付き合うことをよしとしていないということです。

その他にCODEが行った支援としては農業研修があります。村井さんの話にあったように、CODEはアフガニスタンのぶどうの農家を日本に呼び寄せて、1年に1回約10日間、3年間研修を行ってくれました。ぶどうの有機栽培を学ぶというもので、これはたいへん役に経ちました。現在、アフガニスタンでは多くのぶどう農家が化学肥料を使っています。ただ、その村では、小さな場所を設けて有機栽培を行い、化学肥料を使っている場所と分けて二つを比較できるようにしています。短期的に見れば化学肥料を使ったほうが生産量は多いのですが、5年から10年という長いスパンで、どちらが本当にいいのか考えていきたいと農家の方々は考えています。

また別のCODEの支援としては、先ほどのナハリン地震後のことです。アフガニスタンは地震国です。イランからアフガニスタン、そしてタジキスタン、中国へと続く活断層があります。ヒンドークシュ山脈の近く、ナハリンで起きたアフガニスタン史上2番目に大きい地震の後、二つの学校の建設支援をしてくれました。その地域には、もともと学校というものがありませんでした。一つの学校は、女の子のための学校でした。先ほど述べたように、そこを卒業した子が今では何人か大学にまで進むことがで

きました。

簡単に言いますと、この10年間の国際的な援助により、アフガニスタンの人々は次のことを学んだと思います。魚を与えてもらっても、それは食べてしまったら終わりです。魚の釣りを教えてもらうほうが、長期的に見てよっぽど自分たちのためになるということです。

○室崎

どうもありがとうございました。幾つか大切なお話を伺いました。3点ほど感想を述べさせていただきます。まず、CODEの支援した学校から、村として初めて大学生が生まれた。教育の機会、学校をつくるのは地域の力を強くするということでしょう。その成果として大学生が生まれたことも、希望につながっている話の一つかなと思い、支援した側として嬉しく聞かせていただきました。

次に、ぶどうプロジェクトの支援によって、自立して農業経営をする農家が増えていっていること、これはおそらく私たちの支援が間違いではなかったと教えてくれていると思います。しかし今度はぶどう農家が増え、市場が狭くなっていっているという話でした（※注：従来主要な市場であったパキスタンへの輸出が、2010年頃から止められたことも大きな影響を与えている）。

そしてこれがもう一つの大切な問題です。国として市場をどのように広げていくかということでしょう。あるいはぶどうだけではなくて、別の産業への転換の動きも考えていかないといけないのですが、そこには大きな政治の壁があります。それをどう乗り越えるかが大切なことだにご指摘いただいたように思います。

ラフマンさん、今日は何か干しぶどうなど、日本の人たちに売るものを持ってこられているのでしょうか。

○ラフマン

実は、日本に行くと村のみんなに言ったら、ぜひたくさん持っていってくれと、レーズンを持たされそうになったんですが、とても全部は持っていけないとお断りをして少しだけ持ってきましたので、それは村井さんに渡させていただきました。

○室崎

市場を広げるというところにも一つの課題があるように思います。それを含めて、最後、魚の釣り方を教えてくれというのは重要な指摘のような気がいたします。どうもありがとうございます。

それでは、3番目に四川の彭さんから、高齢者のためのコミュニティーセンターが、今どのように使われているか、詳しくお知らせいただければありがたいと思います。

○彭

先ほど申しましたように、地震があってからこの村のどの家も、もうきれいに仕上がって、少し洋風なおしゃれな感じの家が建っています。家が建ったのはいいことなんですが、どの家もお金を借りて建てたので、そのお金を返さないといけないという大きな問題に直面しています。この状況から、村の若い人がみんな外に出稼ぎに行っています。

村に残されたのはお年寄りと婦人の方々と、あとは子供たちです。CODEがそのような村の状況を見て、お年寄りのためのというのがテーマなんですが、大きな場、コミュニティーセンターをつくってくれました。

その老年活動センターが建ってからというもの、村のお年寄りと婦人の方々と子供たちがみんなそこに集まっています。また大きなテレビも支援いただいたので集まって見えています。

センターの運営方法は、村の委員会というも

のがあるんですが、委員会の所有となっていて、それを村人が借りて、その建物を使って商売をするという形になっています。1年の家賃が2,000元です。村の人がそこを借りてやるのですが、委員会もその運営には大きくかかわっており、村の委員会の書記や村長が一番、これから村が発展するための大きなプロジェクトとして掲げて、旅行、ツーリズムをやろうとしています。

既に計画となっているものが、主に五つあります。一つのプロジェクトは、もう既に完成しているのですが、ハスの花のプロジェクトです。活動センターの前にある2万平方キロメートルの広大な土地を使ってそこを大きなハスの花畑にして、それを見にきてもらうというものです。これは昨年（2012年）始めたので、今年が2年目となります。

二つ目のプロジェクトが、センターの建物を「農家楽」といわれるグリーンツーリズムに利用するというものです。センターで提供しているサービスは、お土産屋や喫茶店のようなところ、あと将棋やトランプをして遊べる娯楽施設です。

三つ目はまだこれからですが、魚釣りの場所をつくることです。これも中国ではプールみたいなところを掘って魚を泳がせて、魚釣りを趣味とする人たちが来る一種の娯楽です。そういう魚釣り場を2カ所つくるというプランも立っています。

さらに村の委員会は、旅行客がもし村に泊まりたいときには、宿泊施設としてそれぞれの農民の自宅の部屋を提供するという提案を、村の人に対して行っています。

光明村の政府の上級機関が「郷」と「県」と言うのですが、郷と県の役人も光明村に来てくれて、プロジェクトに対する許可と支援をいた

だいています。村の全ての人たちが、村の委員会の方針に従って、村の収入を増やすように提案をしています。それで、村の人たちが外に出なくても村の中でできることをつくろうとしています。

○室崎

どうもありがとうございます。阪神大震災の復興を図るときにも、コミュニティビジネスは、地域の中で経済力をしっかり持った、生きがいと仕事ができるようなものにしようと、大切にしたんですよね。台湾では1999年の地震の後、グリーンツーリズム、まさに旅行客に来てもらって地域の経済がよくなる取り組みを行って復興の力になりました。それと同じことが今の光明村で行われているような気がします。

質問ですが、レストランが始まっているんですよね。お客さんはたくさん来てくれているのでしょうか。

○彭

はい、たくさんの方が来ています。

○室崎

どうしてたくさんの方が来てくれるのでしょうか。ハスの花がきれいなんではないですか。

○彭

ハスの花もきれいなんですけれども、何よりもやっぱり老年活動センターが、伝統の技術を使って全部木造で建てているというのがすごく魅力的で、それを見にきてくれるんです。

○室崎

私は、このセンターをつくる時は、やはり光明村のお年寄りが一人ひとりぽつんと寂しくなったらいけないので、みんなが集まって交流をする場をつくってあげたい、それがコミュニティの核になればいいなと思っていたんです。でも、それだけではなくて、地域の雇用と経済力を高めるためにいろいろアイデアを出して

進めておられる。私たちが考えている以上に大きな成果が生まれているように思います。

私はそれも「受援力」だと思うんですね。要するに、今度は私たちの支援をどう活かすかということです。やはり地域の人たちの力がないと、それは活きない。その点では光明村の人たちは努力をして、私たちの支援以上のものをつくり出そうとされているように思います。

これらのことを踏まえて、村井事務局長にコメントをお聞きできればと思います。

○村井雅清

ありがとうございました。三つの国に共通することは、私たちが災害後、あるいはアフガニスタンの場合は2001年の空爆後ですが、それぞれの被災地に寄り添って「場」をつくったということかなと思いました。ハイチの場合は農業技術学校という場をこれから支援していく。あるいは中国は老年活動センターという場をつくった。アフガニスタンの場合はぶどう協同組合という場、あるいは機会、仕組みといいましょうか。場をつくったということが共通しているかなと思います。



その中で、中国の場合はいま想像以上の展開をされているので本当に楽しみなんです。ハイチとアフガニスタンの場合は、やはり根底に貧困という問題があるので、課題が大きいかな

と思います。その中でもハイチの場合は技術をきちんと獲得するという事でこの場を生かそうと考えておられます。この先CODEがこれをどれだけ確実なものにできるかが重要です。アフガニスタンの場合は、いくら頑張っても、その市場が閉ざされたり、市場が無いというところが厳しい状況だと思うんですね。

だから、アフガニスタンの場合はやはりもう一度、前回有機栽培の研修をしていただいた山梨県の澤登芳さんという方の名言「品種に勝る技術なし」とはどういうことなのか、きちんと研修生に振り返っていただきたいと思います。つまり、一つの手として、ほかの地域にあるぶどうとは違う付加価値の高いぶどうをいかに育てるかということにシフトしていかなければいけないのではないのでしょうか。澤登さんは「オリンピック」というブランドをつくって世界中に広めたわけですから、そういうことが可能ではあると思うんですね。

そういう意味では、厳しいけれども、まだ私たちもいろいろ学びあいながら共有する部分はあるのではないかと思います。ただ、日本の皆さんがそれを支えていく力を、もっともっとハイチやアフガニスタンに提供していただかなければ成り立たないという面もあるかと思います。そういう意味では、ラフマンさんが「CODEと出会って夢や希望、あるいは未来というものをもらった」と言われましたが、私たちはそれを確実なものにつなげていくための努力をしなければいけないし、もちろん当事者の人たちとも常に密な連携をしながらやっていかないといけないでしょう。まさに、寄り添いから始まってつながるということ、いよいよ次の大きな課題にしっかりと取り組んでいかないといけないということを感じながら聞かせていただきました。

○室崎

ありがとうございます。村井さんのコメントを含めて言うと、大きく三つ大切なことがあります。1番目は場をつくり、夢を与える。これは支援する側が心がけることだと思うんですね。

2番目に必要なことは、単に場ができて、それを生かす、それを力にしていくのは被災地の人々自身である。だから、被災地の人々がその夢を本物にしていくという努力がないといけないのであって、先ほどの彭さんの光明村の取り組みもそうだし、ラフマンさんのところも協同組合を活かして地元の人たちが必死にぶどう栽培に励みました。そういう姿勢があったからこそだと思うので、2番目には、やはり被災地の人々が自らの力で立ち上がらないといけない。

3つ目は、これは次のテーマとも関係しますが、そうは言うものの、やはり政治の壁だとか経済の壁だとか、紛争の壁かもしれませんが、大きな壁がそこに立ちはだかっている。その壁を乗り越えないと本当の意味での将来の希望を実現することは難しい。その意味で、経済的な貧困だとか政治的な紛争といった現実から目をそらしてはいけないということが、今のお三方の話を聞いて重要なポイントだなと感じました。

他にご意見があればお願いします。

○ラフマン

おっしゃるとおり、アフガニスタンの問題は貧困です。ただ、ぶどうの協同組合は、開発のことであれば政治のことであれば、少なくとも自分たちで問題を考え、分析して解決していこうという行動には出ているということでは、やはりここは成功している部分だと思います。将来的には問題の解決もしていくでしょう。

○室崎

今の話の続きで、やはりこれからハイチが復興に向けて立ち上がっていかないといけないと

私は思っています。先ほどレフェルブさんが農業技術学校について述べられましたが、どのような学校にしたいか、どういう人たちを集めてどういう形で学校を運営していこうかという構想があれば詳しく教えていただければありがたいと思います。

○レフェルブ

では、対象とする学生について説明させていただきます。ハイチの教育制度は中等教育に二つのサイクルがあり、一つはバック1、もう一つはバック2と呼ばれています。フランスの「バカロレア」（大学入学資格を得るための国家試験）を「バック」というので、たぶんそれと似たような制度だと思います。

このうちバック2と言われるのがちょうど高校卒業程度、大学入学資格を持つ程度の学生です。バック2の卒業生たちは大学を卒業すると、どちらかという役人になって省庁に入ってしまうので、私たちが必要としているタイプの学生とは違います。農業技術学校が対象としているのは、中等教育でもむしろバック1を修了したぐらいの学生で、そこで今度は実際に農業のプロフェッショナルの支援を得ることによって、より現場での学習を積んでもらいたいのです。農業経営の専門家や農業専門官僚も必要ですが、やはり実際に現場で働く技術者が必要です。ですから農業技術学校ではこのバック1を卒業した人たちを農業の現場の技術者として養成したいと考えています。

それだけが唯一の問題ではなく、教育や訓練を受ける心というものもちよっと問題だと思いますが、やはり大きな問題は、官僚はいても技術者が不足しているということです。例えば一つものをつくるにしても、石の専門家である石工も必要ですし、あるいは大工さんや配管工も必要です。再建を考えるとときに、こういった現

場の技術者がどうしても必要になります。

○室崎

四川やアフガニスタンなどでは、例えば安全な家をつくるために耐震技術を伝えるなどを心がけてきました。しかしハイチについて言えば、安全の技術もそうですが、農業の技術そのものをしっかり伝えていく、アドバイスをする、そういった支援が重要だということでしょう。

ラフマンさんにお聞きしたいのですが、ラフマンさんは農業支援で技術者を育ててきたご経験をお持ちです。今のハイチの方のお話を聞いていて、こういう技術者を育てたらいいというか、農業の技術のレベルを上げるためにはこういうことに気をつけたらいいといったアドバイスがあれば教えていただけますか。

○ラフマン

私自身ハイチ農業の状況をあまりよく知らないのですが、的確なアドバイスはできませんが、ただやはり聞いていて共通した点があると思いました。アフガニスタンも農業国です。多くの技術者が国外へ行っているとレフェルブさんも言われましたが、それは私たちの国でも同じで、国内にはほとんどいないという状況です。

山梨での研修から2年、新しいぶどうの品種についても議論しましたが、実現できていません。やはり読み書きのできない人が新しい品種をつくるというのは難しい話です。やはりそこには専門的な知識を持った人が必要かと思っています。ハイチと同じ問題を抱えています。そして、何かアフガニスタンから経験をお伝えするとすれば、私たちは農業省などにいる数少ない専門家を訪問して、少なくとも何が問題かを考え、どうすれば解決策が見つかるかと考えています。

災害に関して、もう一点私がつけ加えたいことは、発展途上国と先進国とでは状況が全く違うということです。例えば災害の90%が先進国、

10%が発展途上国で起こったとしても、被害を見れば90%は発展途上国に生じ、先進国では10%です。先進国には備えがあり、災害を管理するシステムがあるからです。ハイチやアフガニスタンのような発展途上国にはそれがありません。

○室崎

今のラフマンさんのお話、あるいはレフェルブさんのお話を聞いていると、いわゆるNGOのレベルでの技術援助とはどうあるべきかという課題が突きつけられているように思います。アフガニスタンの場合は農家の方々に日本で受けていただいた研修が成功していますが、村井さんが話されたように、後継者を育てるための学校が十分できていないという問題が残っています。ハイチの場合は、学校ができる見通しはできてきたが、どのような形で技術の中身をうまくサポートしていくかという課題が残っているように感じます。私たちとしても災害後の支援のなかでの技術援助や、あるいは農業の援助というものに対してもう少ししっかり考えていくということを教えられたような気がします。

(3) 今後の課題や計画について

○室崎

CODEの支援はおおむね良かったが、課題も残っているという話でした。次のテーマとして、これからの話をお聞きしたいと思います。これから、例えばCODEに対してどのような支援をしてほしいかということもあるでしょうし、あるいは皆さん方の国における復興においてこれからどのようなことが問題になってくるのか、その課題や問題点、復興していく上で何が必要かという話をぜひお願いしたいと思います。

今度は中国の彭さんからお聞きします。先ほ

ど、コミュニティーセンターが活用され始めて少し元気になっているというお話でしたが、今、さらにどのようなことが必要かお話しいただければありがたいと思います。

○彭

光明村の中はみんなの期待を受けて、もう既に営業をしておりますが、やはりまだ名前が色々なところに知られていないことが大きな問題です。光明村は香港からの支援を受けて障害者の集まるステーションにもなっており、「ハスの花の基地」という名前で、大きな看板を村の中に立てています。村の一番重要なプロジェクトとして始まってはいるのですが、まだ名前が多くのところ知れ渡っていないというのが問題です。

○室崎

先ほど言いましたように、光明村については、みんなが出稼ぎに行き村の中にはお年寄りと子供しかいない状況になってしまうといけないうことがありますがよね。だから、やはり村の中にお父さん、お母さんも働けるような環境をつくっていかないといけないと思いますが、そのあたりの見通しはいかがでしょう。

○彭

村の委員会もできるだけ出稼ぎを減らそうという方向で考えていて、それぞれの家も、もし旅行客が来たら接待できるような状況にしておいてくださいということです。

○室崎

何か、さらにCODEにもっとこういう支援をしてほしいという希望みたいなものはいかがでしょう。

○彭

光明村の位置は、ある町を右のほうに折れてずっと行ったところにあります。光明村の中には看板ができていますが、その町の分岐点

のところに看板がないと、みんな真っすぐ進んで北のほうにある有名な観光地にそのまま行ってしまうので、その看板をCODEがしてくれたらもっとたくさんの人が来ると思います。

○室崎

先ほどのラフマンさんの話と同様、市場を開拓しないといけないということですよね。力はいってきたけれども、自分たちでそれを生かすマーケットをつくらないといけません。私が代わりに言いますと、本当は日本の人たちにたくさんそのレストランに来ていただいて、市民レベルの交流をもっと深めればきっといいんだろうと思います。日本人が遊びにくるというのは大歓迎ですよ。

○彭

ぜひお越しく下さい。大歓迎です。

○室崎

どうもありがとうございます。それでは、続いてラフマンさんから、これからの災害復興で何が必要か、あるいは災害時の支援というものはどうあってほしいかについてお話をお聞きできればと思います。

○ラフマン

カブールで6カ月前に経済学者たちによる会議がありました。アフガニスタンには、言い尽くせないぐらいの問題がありますが、経済学者などが200人集まり、その多くの問題が二つのポイントに絞りこまれました。一つが人口のコントロールです。2020年には人口が約5000万人になると言われています。今が2500~3000万人ですので、約2倍です。もう一つ重要なことは農業の状況を改善することです。

私はここに来る前、ぶどうの協同組合の人たちとミーティングをしました。彼らが一番何とかしたいと考えていることは市場へのアクセスの問題です。毎年十分な生産量がありますが、

それに対して市場がないということが問題になっています。売れないぶどうはレーズンにするのですが、1キロ1ドルから2ドルのたいへん安い状態で売られています。需要が無いのです。ですので、そこを何とかCODEが支援してくれないか、これはコミュニティの全ての人たちからのリクエストです。

そしてもう一つは、農業の研究センターみたいなものをつくれなかと考えております。そのようなところで新しい品種を開発できるのではないのでしょうか。現在アフガニスタンで育てられている品種は30年前のもので、生産量は低く、品質も良くありません。

国際社会が、アメリカやカナダで品種改良された大豆や綿花などの種を持ち込んだのですが、アフガニスタン国内では試されたことの無いもので、しかも昨今の気候変動などの影響で結果的に収穫量がゼロでした。農家たちは失望してしまいました。

○室崎

農業の発展のために二つのことが必要で、1つ目が市場の開拓、2つ目は村井さんの話の品種の問題かもしれませんが、要するに技術力を高める、農作物の品質を上げるということだろうと思います。それを全部CODEがうまく引き受けられるかというのはなかなか難しいわけです。要するに、支援の中で実現できることと、やはり政治の壁を取り除かないと実現できないことの両方があると思います。そういうことも踏まえてこれからの支援のあり方も考えていかなければならないと思っております。

それでは、今度はレフェルブさんに、ハイチはなかなか大変だろうと思いますが、これからの復興にとって何が問題か、あるいはどのような支援が必要か、先ほどから技術者の養成が大きな課題だと言われていますが、それ以外にど

のような課題があるかなどを教えていただければありがたいと思います。

○レフェルブ

ハイチでもいろいろな問題が錯綜しています。一体どこから話せばいいのかわからないほどですが、ちょうど昨年、JICAの研修に出席するチャンスを得ました。このセミナーはいわゆる産学協同セミナーで、ハイチの農業省、JICA、セントドミニカ大学の三つの協力のもとに開設されたものでした。これにGEDDHから3人が参加しました。問題錯綜と言いましたが、全てに当たることはできないので、優先順位をつけて解決していかなければなりません。やはりGEDDHにとっては若い世代の教育、研修というのが最優先になると思います。

また別に行っているプロジェクトがありまして、一つは高齢者の終末期医療の問題です。ある村を老人介護の村にして、終末期の医療あるいは必要な介護のサポートをする、そういった村をつくりたいと考えています。

もう一つのプロジェクトは、排水システムをうまくつくることです。川下のほうに水を流せば自然流下ということで一番簡単なのですが、実は川下のほうが高級住宅地になっているので、なかなかそういったものがない。せっかく投資をしても、どこかでブロックされてしまうという心配があるので、いわゆる排水処理池を川下ではなく、少し海拔の高いところにつくろうと考えています。もちろんこのような排水システムをつくるにも技術者が必要だということはおわかりいただけると思います。

○室崎

CODEに対する期待や、これからの支援で何が必要かというお話をいただきました。繰り返しますが、CODEはそんなにたくさんお金を持っている団体でもないのので、例えば排水溝

をつくってくれと言われてもなかなかできません。私たちは、先ほどから言われているように、希望や知恵といったものを届けることができると思うんですね。いろいろ注文が出たので、何ができるかできないか、村井さんの意見を聞きたいと思います。

○村井

つらいことですが、室崎副代表が繰り返しているように、CODEは本当に貧乏なNGOです。すから、お金の要ることというのは難しいのです。でも、少しでも希望や夢が実現するために、この後CODEの中でも議論したいと思います。また今日会場の皆さんのなかにご支援いただけるという方もおられると思いますし、何かできないかと思って来ていただいている方もおられると思います。その意味では、今日が第1段階の場として捉えていきたいなと思います。



(4) 質疑応答

○室崎

今日はたくさんの方に来ていただいていますので、ご質問もあるかもしれませんが、場合によっては、「俺がこういうふうに手伝ってやる」という決意表明があるかもしれません。これから会場の方のご意見を聞きながら話を進めていきたいと思っています。

その前に一つお伝えさせていただきます。配布資料の中に、「CODE・AIDへのご支援

をよろしくお願いします！！」というものがあります。10周年を記念して、CODEの活動を支えるファンドのようなものをつくっていきたいと思います。

理由はたくさんあります。一つは、災害直後は皆さんからいただいた募金をベースにして支援活動ができますが、先ほどの話をお聞きになってもおわかりのように、災害の直後だけではなく、農業支援や技術協力などいろいろなことをしていくためには、持続的な財政の仕組みをつくる必要があります。

それからもう一つ、これは私の思いも入っておりますが、先ほどハイチでも若手の技術者が必要とおっしゃったように、NGOの活動をしていこうと思えば、支援する側の日本でも若い志を持った人材をしっかり育てていかないといけないと思います。これにもたくさんのお金が必要です。

村井さんも私も言ったように、お金がないから支援できませんという答えは、今の議論を聞いていただいてもできません。やはり必要なものは何とかしてサポートしなければならない。そのためのバックアップが必要なので、10周年を記念して、「CODE・AID」を立ち上げて頑張っていこうとしております。ご支援や激励をいただければ幸いです。よろしくお願いいたします。

では、ここからはどんなことでも結構ですのでご質問、ご意見等をいただきたいと思います。三つの国の方は、ぜひ皆さまの意見を聞きたいとおっしゃっています。

○参加者

ハイチ友の会代表の小澤と申します。まず初めに、私は山梨県の出身でして、ラフマンさんが山梨のぶどうの技術を母国で大事にされ、活躍されていることに県民として嬉しく思いました。

貴重な発表をありがとうございました。

私どもの会は、「ハイチ友の会」というだけありまして、ハイチ支援に携わってきた団体です。GEDDHの皆さんともこれまでも交流を持ってやってまいりました。最後のご質問の中に、GEDDHとして今後、学校運営をどのような展望でやっていかれたいかということがあったと思います。そのお答えとして、やりたいことがいっぱいあることがわかったんですが、どれに集中してやっていきたいと考えておられるのか、ぜひここでお聞きしたいなと思いました。

○室崎

レフェルブさん、いかがでしょうか。

○レフェルブ

確かに、いろいろなプロジェクトを同時進行させている、そういった将来の方向性はありませんが、やはり私たちにとって最優先の課題は、農業技術学校の設立です。

○室崎

建物をつくるだけではなくて、中身のカリキュラムというか、教育をどういうふうにしているのか、そういう趣旨ですよね。例えば日本から指導者を派遣するといったことや、学校にどのような支援が欲しいかということをお話していただけるとありがたいと思います。

○レフェルブ

もちろん指導者、先生も必要です。ハイチでも大学で農業学を修めて先生になってくれるような人はいますが、もし日本から農業の現場の専門家が先生としてハイチに来てくだされば、それは素晴らしいことだと思います。日本は高度な先進の農業技術を持っていらっしゃるの、将来そういうことが実現すれば嬉しく思います。

○室崎

日本も基本的には農業国で、農業のプロがた

くさんおられますので、そのような交流、つながりをつくるようなことも支援の課題かなと思います。CODEでも検討してみたいと思います。そのほか、いかがでしょうか。

○参加者

CODEの村上と申します。兵庫県は農業立国なんですね。ましてや神戸市は軟弱野菜の生産日本一なんです。兵庫県または神戸市には現地で農業指導できる技術者がたくさんいますし、毎日、田んぼや畑で野菜や米をつくる技術を持ったお百姓さんがいっぱいいます。私自身も百姓です。今、兵庫県の井戸知事が、10年間かけて県の農業の7割ほどを有機農業に切りかえていくという方向で進めております。そこまで断言できるということは、いい技術者といい百姓が育っているということです。ぜひとも兵庫県のほうに投げかけてもらえたら、いいバックアップができるのではないかと思いますので、参考にしてください。

○レフェルブ

非常に心強く、嬉しいです。

○室崎

いいご意見どうもありがとうございました。そのほか、いかがでしょうか。

○参加者

コープこうべの者です。質問ではないのですが、彭さん、ようこそお越しくださいまして、ありがとうございます。老年活動センターができたときに光明村にお邪魔しました。それから、昨年の交流会（※注：2012年3月、金沢大学とCODEの共催で、四川から彭さんを含む被災者ら4人が来日。能登・陸前高田でのシンポジウムへの登壇や東北東日本大震災の被災者と意見交換・交流を行った。）にもお邪魔したのですが、さっきおっしゃったように、センターがいろいろなことに使われている、これからも使

っていきたいということをお聞きして本当に嬉しく思いました。コープこうべは、CODEと一緒に四川を忘れませんということを言いたかったのです。

○室崎

彭さん、何かコメントありますでしょうか。

○彭

謝謝。ありがとうございます。

○室崎

コープこうべさんのご発言でしたが、アフガニスタンも、四川も、このCODEのいろいろな取り組み、もうコープこうべさんにも非常に大きなお力添えというか、パートナーとして一緒に取り組ませていただいています。この場を借りてコープさんには心からお礼を申し上げたいと思います。どうもありがとうございます。

そのほか、ご質問、ご意見等ございませんでしょうか。では、今日私の友人で、北京の清華大学の顧林生先生が来られているので、コメントをよろしくお願いいたします。

○参加者

神戸大学都市安全研究センターの客員教授で顧と申します。四川大学の災害復興管理学院の教授も務めており、昨日北京から来ました。今日は参加できて非常に嬉しく感じます。

芹田代表、村井事務局長、3カ国からの発表といろいろご報告を聞きましたが、やはりここまで継続できたCODEの精神は、私たちは宝物だと感じたと思います。私は一人の中国人として、そして、もう一つは防災を研究している人間として、本当に敬意をあらわしたいと思います。これは神戸の精神か、あるいはこの阪神・淡路地震でできた精神だと思います。ぜひ今後も継続していただきたいと思います。

一つお願いがあります。四川地震は間もなく5周年ですが、ハードの復興から、これからは

ソフトの復興、ソフト方面の持続可能な発展をどうするかが大きな課題です。その中で、四川は神戸に学ばなければならないと思います。学ぶものとは、この復興の精神、復興の連帯、復興のつながり、復興による人間の変化、人間の価値観など、どのように後世につなげていくか、どのように四川から世界に向けて、CODEのように世界に貢献できるかということは重要じゃないかなと思います。この点は、ぜひ今後、CODEの四川のバージョンをつくることができるか、ということが一つの要望でございます。

彭先生は、中国人としては非常に素朴です。こういう素朴さは近代化した中国ではもうあまりない。ということは、それは宝物じゃないかなと思います。ぜひ、彭先生はこの村でこういうものを持ち続けていただき、このツーリズムはたぶん成功じゃないかなと思います。ご支援いただいた神戸市あるいは日本の国民に感謝いたします。どうもありがとうございます。

○室崎

中国の顧先生からCODEの精神、考え方にお褒めの言葉をいただきましたが、ラフマンさん、彭さん、レフェルブさんはCODEの支援についてどう思っておられるでしょうか。CODEを褒めろと言っているのではなく、悪口でもいいですし、CODEの精神についてどのように考えておられるかお聞きできればと思います。ラフマンさんからお願いします。

○ラフマン

先ほども出ましたように、CODEの支援は、決して量的には多くはないけれども、質としてはたいへん価値のあるものだと思っています。CODEから得たメッセージはとても助けになりました。希望をなくした人々が自分の土地に帰ってきて、また新たに働き始め、新たな地点に立つことができました。

ほかの国と比べてですが、先ほど顧先生がおっしゃっていたように、中国のような国では「CODE 2」のようなものができたら素晴らしいと思います。ただ、やはりアフガニスタンやハイチのような途上国と言われるところでは、生きていくためのニーズがほかにたくさんあり、なかなかそういう状態になるのは難しい状況です。日本は希望を与えてくれました。私たちはまだスタート地点に立ったばかりです。私たちが外の地域を支援できるような状態になるにはまだ長い時間を要すると思います。

やはりアフガニスタンの状況を皆様にお伝えするということはたいへん難しいのだなと感じております。ただ、アフガニスタンが抱えるもう一つの大きな問題について申し上げておきたいのですが、それは女性のことです。アフガニスタンの人口のうち81%が女性ですが、識字について言えば、85%の女性は文字の読み書きができません。読み書きのできる15%は学校に通う若い世代、10代の女の子たちです。また、ほとんどの女性には収入がありません。首都カブールのような首都で働く一部の女性を除いて、女性は男性に頼って生活しています。21世紀になってもまだそのような状況なのです。毎日のように戦争による死者や負傷者が出ていますが、同時に毎週のように女性や少女があちこちへ売られ、社会的な制裁として、鼻や耳を切り落とされたりする犠牲者になっています。

○室崎

非常に重い課題ですが、大切なことです。最初にレフェルブさんも、ハイチで女性に対する暴行が止まらないというお話をされていました。貧困の問題に加えて、女性が差別された地位に置かれて大きな犠牲になっているという問題もあり、一緒に考えていかないとはいけません。

芹田代表の基調講演の中で、最後の一人とは

一体誰なのかというときに、それがお年寄りであったり、女性であったり、子供であったりします。やはりそこに目を向けないといけないのは、CODEの精神と相通ずるところだと思います。

それでは彭さん、CODEの支援についてどう思われているか、感想でも結構ですのでよろしく願いいたします。

○彭

CODEの活動を見てきて、村人に助け合いの心が生まれました。国境を越えてまで助けに来るということが、村人にとってはすごく新鮮でした。ある場所で災難が起きると、四方八方から国を超えても助けてくれる人がいるという信念を学び、また村の中でもそれが可能なのだとわかりました。さらに多くの困難に陥った人々に手を携えて人類に貢献するということを学びました。

○室崎

どうもありがとうございます。まさに、それも災害時の支援をする文化かもしれません。基本的にはお互いさまだということです。CODEは盛んにお互いさまだということを言うんですね。困った人は助け合わないといけないし、力を合わせないといけないということで、そういう輪が広がっていくことはすばらしいと思います。

では最後になりましたが、レフェルブさん、CODEの支援についてどういうふうにお感じになっているか、ご意見を伺いたと思います。

○レフェルブ

2012年8月にCODEから芹田代表と岡本さんが来られたときに、初めてお目にかかりました。そのとき、あまりお話はたくさんできなかったのですが、CODEの精神というものはお二人の雰囲気から感じる事ができたと思いま

す。やはり支援をするためのもとなる連帯感というものを強く感じました。私は日本の方々とお話をすることが今までも結構ありましたが、お二人は机上の空論ではなくて、具体的なことを現実的にきっちりとする人たちだなということを感じました。したがって、このCODEの精神というのは、何といってもその連帯感ではないかなと思いました。

○室崎

お褒めの言葉なのか、激励なのか叱咤なのかわかりませんが、私たちが目指していたいい部分というのは、信頼関係をベースにした支援をしないといけない、ということだと思います。人と人とのつながりはとても大切で、「お互いさま」の関係性をつくらなくてはなりません。また、ラフマンさんが最初に言われたように、やはり私たちは希望や展望をしっかりと伝えていなくてはなりません。私たちが言うのは、「与える支援ではなくて引き出す支援」、「被災地の力を引き出していくんだ」ということです。私たちが心がけてきた部分が少しずつ被災地の人たちにも受け入れられている。受け入れられる関係性があつたから、少しは復興のお役に立てたのかなという感じがするのだと思います。

また会場から手を挙げていただいております。



○参加者

一番良くないのは、無知の善意といいますが、海外から来たNGOやNPOがやったことで一

番とんちんかんなこと、おかしかったことや迷惑こうむったこと、もしそういうことがあればご意見いただければ幸いです。神戸の地震のとき一番とんちんかんだったのは、ダイアナ妃が来たことですね。行政の者はどう言ったか知りませんが、神戸の市民の人は、あの人は何しに来たんやろうと、これが真実なんですね、市民の声なんですね。

○室崎

ご質問は、海外からいろいろな形で支援が入ってきますが、この支援はよくないとか、あるいは被災地のことをよく考えていないとか、ずれていた支援の例があったら教えてくださいということですね。

○ラフマン

アフガニスタンには、やはり良いNGOもあれば、良くないNGOもあります。例えばその活動が経験や、知識など証拠に基づいて行われているものであればいいと思いますが、NGOによっては例えばワシントンやロンドンの本部レベルでつくった計画をアフガニスタンの村に持ってきて、すぐに何かを開始するということになります。

例えば先ほどお話ししたように、アメリカの団体が100トンの大豆を持ってきてそれを農家に配りました。土壌に植えましたが決してそれが育つことはありませんでした。品種改良された種でしたが、それはアフガニスタンで実験されたことはなく、気候に合わなかったのです。

他の例として、これは3～4年活動しているフランスのNGOで、綿花の種を持ち込んできました。ソビエト連邦時代、アフガニスタンは綿花の一大産地でした。侵略していたときに、しかし、30年に及ぶ戦争によってすべて破壊されてしまいました。それで、再度綿花を生産するのがいいだろうと、カナダから品種改良され

た綿花の種を持ってきたのですが、同じく失敗でした。ですからこのNGOは、次はアフガニスタン国内の研究施設などでより良い品種をつくらなくてはなりません。アフガニスタンの外で計画されて持ち込まれたものは、このように成功しないのです。

NGOについて話すと切りがないのですが、もう一つだけつけ加えさせてください。例えば先ほどアメリカを例に挙げましたが、アメリカなどはアフガニスタンの最大の支援国で、たくさんの方の活動をアフガニスタンで実施しています。問題は、彼らの移動費や滞在費はとて高く、フィールドで使うお金の100倍もかかっているのです。彼らが少し村に行くと言っても軍用車など様々なものを必要とします。計算すると、その村でプロジェクトに使うお金よりも移動や滞在の費用が100倍も高いということがわかりました。

ニュースなどで見られたことがあるかもしれませんが、多額のお金がアフガニスタンに寄付されています。ただ現実には、各国からアフガニスタン政府に渡ったお金がアフガニスタンの人々に届くかという疑問です。90%はそれぞれの国に返るような仕組みになっているのです。

○室崎

どうもありがとうございました。彭さんは海外からの支援で、これは困ったとか、これはうまく実態に合わないというようなことがありますたら教えてください。

○彭

中国は国外からの支援を受けるときには大体政府を通します。それぞれの外国がどんな支援をしてくれるのか、国内のどこでどういう需要があるかを政府が把握してよくアレンジしてくれるので、被災者にとって要らないものが来た

といったすれ違いはあまりありません。

吉椿さんが最初に村に来てくれたときには、NGOとして政府を通さずに、そのまま村民の人たちと交流を始めたので、村民の人たちは「何をしに来たんだろう」、「どこから来たのだろう」ということがわからなくて、少し疑問に思いました。

例えば、活動センターを建てるに当たって、村長や書記をやっていた村の幹部たちと最初にやりとりがなかったということが少し尾を引いて、彼らがあまりこのセンターの建築に協力的でなかったところもあります。そういう背景もあってセンターの計画がスムーズに行かなかった部分もありますが、3年に1回リーダーが変わるんです。ちょうどそれに当たって、新しい書記、今日来られなかったのですが劉書記という方が積極的にプランを進めてくれて、無事センターが建つこととなりました。中国に支援をしてくださるときは、ぜひ政府の理解も得ながらやるとよりいいと思います。(※注：外国人が中国で活動する場合、政府を通さなくてはならないが、NGOとしてどこまで住民主体を大切にするかが課題である)。

○室崎

最後になりましたが、レフェルブさん、いかがでしょうか。

○レフェルブ

今、お二人のパネリストの方からお話を聞いて、3カ国の状況はほとんど一緒だと思いました。ハイチの場合は、政府を通して海外からの援助が来た場合、80~90%は国民のところまで届かないんです。ほかのパネリストの経験された問題とは少し違うかもしれませんが、地震の直後にドミニカ共和国の外交官の方がお越しになりました。そのとき、ドミニカ共和国の代表としてぜひ復興に参加したい、援助したいと申し

出てくださいました。CODEの海外研究員のクワウテモックさんもよくメキシコからハイチにお越しになっていたのも、彼にもそのお話を一緒に聞いていただくことになったんですが、外交官は「大統領府の再建の援助をしたい」とおっしゃったんですね。それを聞いて私はショックを受けました。クワウテモックさんもしましたのであまりにも激しく反論するのはよくないと思って気持ちを静めました。大統領府は政府の建物ですから、政府の予算でいくらでも再建できると思ったんです。それよりも援助というのなら何か若い人に持続可能なものをつくっていただければと思ったんです。例えば若い人たちが使えるように大学のキャンパスなどを新しくつくるとか、それこそ技術の土壌をつくると思います。今、ハイチの北部のほうではこういった大学、キャンパスが10カ所で建設されています。

それと私の個人的な意見ですが、特にハイチの場合は、支援を受けるときにそれに伴うリスクも考えなければならないと思います。NGOでもやはり真摯な組織とお付き合いをしたいと思っています。ラフマンさんがおっしゃったように、NGOの中でも良いところもあれば、少し良くないところもあるというご意見もありました。誠意のあるNGOと仕事をさせていただきたい、支援を受けさせていただきたいと思っています。

○室崎

どうもありがとうございます。3点だけ、簡単にまとめさせていただきます。

1点目は、私たちの10年間の支援は基本的には間違いではなかったということが確認できたと思います。今日来られた三つの国の方々から、私たちの取り組みに対して評価いただいたことをもう一度心にとめて頑張りたいと思います。

2点目は、同時に多くの課題をいただいたような気がします。まだまだCODEの力も弱いですし、お金がないからということを言い訳にはできませんので、足りない部分もあったという点を確認させていただきとても良かったと思います。

そして3点目は、今日のテーマ「寄り添いからつながりへ」の「つながり」という言葉は今後の10年にとって重要です。2年間だけ支援をするというような取り決めがあったわけですが、やはり持続的に、時間的なつながりをつくることも大切です。加えて空間的なつながり、例えばアフガニスタンとハイチの共通項のような面もあります。世界の人たちの中にいろいろな共通項もあるし、共通の課題もある。そこで、CODEがコーディネーションを行い、今度は被災地と被災地、世界中のいろいろな人たちのつながりもつくっていかないといけないのではな

いかと思います。

最後に、これまでCODEがこうした活動ができたのも、ひとえに全国の皆様のご支援のおかげです。災害のときにはいつも救援の募金をお願いしてご協力いただいたことが、こうした形になってきたということにお礼を申し上げて、私のコーディネーターとしての最後のまとめに代えさせていただきたいと思います。そして、最後にパネリストのラフマンさん、彭さん、レフェルブさんに拍手で感謝の意を表したいと思います。どうもありがとうございました。

閉会の言葉 CODE副代表理事 水野雄二

長時間にわたりまして、このCODE10周年記念シンポジウムにご参加いただきましてありがとうございました。特に、3人のパネリストの皆さん、ありがとうございました。

今日はこの10年をお祝いするハッピーな気持ちで参りましたが、先ほど室崎先生がまとめてくださったように、多くの課題をいただいて複雑な気持ちになったシンポジウムでした。しかし、最初は1995年のサハリンの支援からですので、51件、30カ国以上、18年を超えるCODEの活動でございます。多くの皆様が支えてくださったこの18年であったと思います。今日、た

くさんの課題をいただきました。また先ほどCODE・AIDのアピールもございました。皆さんとともに引き続きつながりを保って、また多くのご支援をいただきともに歩んでまいりたいと思っております。

